

# 断崖の錯覚

太宰治

青空文庫



# 一

その頃の私は、大作家になりたくて、大作家になるためには、たとえどのようなつらい修業でも、まだどのような大きい犠牲でも、それを忍びおおせなくてはならぬと決心していた。大作家になるには、筆の修業よりも、人間としての修業をまずして置かなくてはかなうまい、と私は考えた。恋愛はもとより、ひとの細君を盗むことや、一夜で百円もの遊びをすることや、牢屋へはいることや、それから株を買って千円もうけたり、一万円損したりすることや、人を殺すことや、すべてどんな経験でもひとつおりはして置かねばいい作家になれぬものと信じていた。けれども生れつき臆病ではにかみやの私は、そのような経験をなにひとつ持たなかつた。しようと決心はしていても、私にはとても出来ぬのだつた。十銭のコーヒーを飲みつつ、喫茶店の少女をちらちら盗み見するのにさえ、私は決死の努力を払つた。なにか、陰惨な世界を見たくて、隅田川すみだがわを渡り、或る魔窟へ出掛けて行つたときなど、私は、その魔窟の二三丁でまえの小路で、もはや立ちすくんで了つた。  
その世界から発散する臭気に窒息しかけたのである。私は、そのようなむだな試みを幾度

となく繰り返し、その都度、失敗した。私は絶望した。私は大作家になる素質を持つてないのだと思つた。ああ、しかし、そんな内気な臆病者こそ、恐ろしい犯罪者になれるのだつた。

## 二

私が二十歳になつたとしの正月、東京から汽車で三時間ほどして行ける或る海岸の温泉地へ遊びに出かけた。私の家は、日本橋呉服問屋であつて、いまどちがつて、その頃はまだ、よほどの財産があつたし、私はまたひとり息子でもあり、一高の文科へもかなりの成績ではいつたのだし、金についてのわがままも、おなじ年ごろの学生よりは、ずっと自由がきいていた。私は、大作家になる望みを失い、一日いっぱい溜息ばかり吐いていたし、このままでいてはついには気が狂つて了うかも知れぬと思い、せつかくの冬休みをどうにか有効に送りたい心もあつて、その温泉行を決意したのであつた。私はそのころ、年若く見られるのを恥かしがつていたものだから、一高の制服などを着て旅に出るのはいやであつた。家が呉服商であるから、着物に対する眼もこえていて、柄の好みなども一流であつた。

た。黒無地の紺の重ねを着てハンチングを被り、ステッキを持つて旅に出かけたのである。身なりだけは、それでひとかどの作家であつた。

私が出かけた温泉地は、むかし、尾崎紅葉の遊んだ土地で、こここの海岸が金色夜叉という傑作の背景になつた。私は、百花楼というその土地でいちばん上等の旅館に泊ることにきめた。むかし、尾崎紅葉もここへ泊つたそうで、彼の金色夜叉の原稿が、立派な額縁のなかにいれられて、帳場の長押のうえにかかつっていた。

私の案内された部屋は、旅館のうちでも、いい方の部屋らしく、床には、大観の雀の軸がかけられていた。私の服装がものを言つたらしいのである。女中が部屋の南の障子を開けて、私に気色を説明して呉れた。

「あれが初島でござります。むこうにかすんで見えるのが房総の山々でござります。あれが伊豆山。あれが魚見崎。あれが真鶴崎。」

「あれはなんです。あのけむりの立つている島は。」私は海のまぶしい反射に顔をしかめながら、できるだけ大人びた口調で尋ねた。

「大島。」そう簡単に答えた。

「そうですか。景色のいいところですね。ここなら、おちついて小説が書けそうです。」

言つて了つてからはつと思つた。恥かしさに顔を真赤にした。言い直そうかと思つた。

「おや、そうですか。」若い女中は、大きい眼を光らせて私の顔を覗きこんだ。運わるく文学少女らしいのである。「お宮と貫一さんも、私たちの宿へお泊りになられたんですつて。」

私は、しかし、笑うどころではなかつた。うつかり吐いた嘘のために、氣の遠くなるほど思いなやんでいたのである。言葉を訂正することなど、死んでも恥かしくてできないのだった。私は夢中で呟いた。

「今月末が〆切なのです。いそがしいのです。」

私の運命がこのとき決した。いま考へても不思議なのであるが、なぜ私は、あのような要らないことを呟かねばならなかつたのであろう。人間というものは、あわてればあわてるほど、へまなことしか言えないものなのだろうか。いや、それだけではない。私がその頃、どれほど作家にあこがれていたか、それはかない渴望の念こそ、この疑問を解く重要な鍵なのではなかろうか。

ああ、あの間抜けた一言が、私に罪を犯させた。思い出すさえ恐ろしい殺人の罪を犯させた。しかも誰ひとりにも知られず、また、いまもつて知られぬ殺人の罪を。

私は、その夜、番頭の持つて来た宿帳に、ある新進作家の名前を記入した。年齢二十八歳。職業は著述。

### 三一

二三日ぶらぶらしているうちに、私にも、どうやら落ちつきが出て來た。ただ、名前を変えたぐらい、なんの罪があるものか。万が一、見つかったとしても、冗談として笑つてすませることである。若いときには、誰しもいちらはやることなのにちがいない。そう思つて落ちついた。しかし、私の良心は、まだうずうずしていた。大作家の素質に絶望した青年が、つまらぬ一新進作家の名をかたつて、せめても心やりにしているということは、実にみじめで、悲惨なことではないか、と思えば、私はいても立つても居られぬ気持であった。けれども、その慚愧ざんきの念さえ次第にうすらぎ、この温泉地へ来て、一週間目ぐらいには、もう私はまったくのんきな湯治客になり切つていた。新進作家としての私へのもてなしが、わるくなかったからである。私の部屋へ来る女中の大半は、私に、「書けますでしようか。」とおそるおそる尋ねるのだった。私は、ただなごやかな微笑をもつてむくい

るのだつた。朝、私が湯殿へ行く途中、逢う女中がすべて、「先生、おはようござります」と言うのだつた。私が先生と言われたのは、あとにもさきにものときだけである。

作家としての栄光の、このように易々と得られたことが、私にとつて意外であつた。

窮すれば通ず、という俗言をさえ、私は苦笑しながら呟いたものであつた。もはや、私は新進作家である。誰ひとり疑うひとがなかつた。ときどきは、私自身でさえ疑わなかつた。

私は部屋の机のうえに原稿用紙をひろげて、「初恋の記」と題目をおおきく書き、それから、或る新進作家の名前を——いまは私の名前を、書き、それから、二三行書いたり消したりして苦心の跡を見せ、それを女中たちに見えるように、わざと机のうえに置きつなしにして、顔をしかめながら、そとへ散歩に出るのだつた。

そのようなことをして、私はなおも二三日を有頂天になつてすごしたのである。夜、寝てから、私はそれでも少し心配になることがあつた。若し、ほんものがこの百花樓へひよつくりやつて来たら、と思うと、流石にぞつとするのであつた。そんなときには、私のほうから、あいつは贋物だと言つてやろうか、とも考えた。少しずつ私は団太くなつていたらしいのである。不安と戦慄せんりつのなかのあの刺すようなよろこびに、私はうかされて了つたのであらう。新進作家になつてからは、一木一草、私にとつて眼あたらしく思えるのだ

つた。海岸をステッキ振り振り散歩すれば、海も、雲も、船も、なんだかひと癖ありげに見えて胸がおどるのだった。旅館へ帰り、原稿用紙にむかって、いたずらがきして居れば、おのれの文字のひとつひとつが、額縁に収めるにふさわしく思えるのだった。文章ひとつひとつが、不朽のものらしく感じられるのだった。そんなゆがめられた歓喜の日をうかうかと送っているうちに、私は、今までいちども経験したことのない大事件に遭遇したのである。

#### 四

恋をしたのである。おそい初恋をしたのである。私のたわむれに書いた小説の題目が、いま現実になつて私の眼前に現われた。

その日私は、午前中、原稿用紙を汚して、それから、いろいろしたような素振りをしながら宿を出た。赤根公園をしばらくぶらついて、それから、昼食をたべに街へ出た。私は、「いでゆ」という喫茶店にはいつた。いまは立派な新進作家であるから、むかしのように、おどおどしなかつた。じつさい、私にとつて、十日ほどまえの東京の生活が、十年も二十

年ものむかしのように思われていたのである。もはや私は、むかしのような子供でなかつた。

「いでゆ」には、少女がふたりいた。ひとりは、宿屋の女中あがりらしく、大きい日本髪をゆい、赤くふくれた頬をしていた。私は、この女には、なんの興味も覚えなかつたのであるが、いまひとりの少女、ああ、私はこの女をひとめ見るより身内のさつと凍るのを覚えた。いま思うと、なんの不思議もないことなのである。わかい頃には、誰しもいちどはこんな経験をするものなのだ。途上ですれちがつたひとりの少女を見て、はつとして、なんだか他人でないような気がする。生れぬまえから、二人が結びつけられていて、何月何日、ここで逢う、とちやんときまつっていたのだと合点する。それは、青春の靈感と呼べるかも知れない。私は、その「いでゆ」のドアを押しあけて、うすぐらいカウンタア・ボックスのなかに、その少女のすがたを見つけるなり、その青春の靈感に打たれた。私は、それでも新進作家らしく、傲然ごうぜんとドア近くの椅子に腰かけたのであるが、膝がしらが音のするほどがくがくふるえた。私の眼が、だんだん、うすくらがりに馴れるにしたがい、その少女のすがたが、いよいよくつきり見えて來た。髪を短く刈りあげて、細い頬はなめらかだつた。

「なにになります？」

きよらかな声であると私は思つた。

「ウイスキー。」

私は、誰かほかのお客がそう答えたのだと思つた。しかし、客は私ひとりなのである。そのときは、流石<sup>さすが</sup>に慄然とした。気が狂つたなと思つた。私は、うつろな眼できよろきよろあたりを見まわした。しかし、ウイスキーのグラスは日本髪の少女の手で私のテエブルに運ばれて來た。

私は当惑した。私は今まで、ウイスキーなど飲んだことがなかつたのである。グラスをしばらく見つめてから、深い溜息とともにカウンタア・ボックスの少女の方をちらと見あげた。断髪の少女は、花のように笑つた。私は荒鷺<sup>あらわし</sup>のようにたけりたけつて、グラスをつかんだ。飲んだ。ああ、私はそのときのほろにがい酒の甘さを、いまだに忘れることができないのである。ほとんど、一息に飲みほした。

「もう一杯。」

まったく大人のような団太さで、私はグラスをカウンタア・ボックスの方へぐつと差しだした。日本髪の少女は、枯れかけた、鉢の木の枝をわけて、私のテエブルに近寄つた。

「いや、君のために飲むのじゃないよ。」

私は追い払うように左手を振った。新進作家には、それぐらいの潔癖があつてもいいと思つたのである。

「（う）あいさつだわねえ。」

女中あがりらしいその少女は、品のない口調でそう叫んで、私の傍の椅子にべつたり坐つた。

「はつはつはつは。」

私はひとくせありげに高笑いした。酔ぱらう心の不思議を、私はそのときはじめて体験したのである。

## 五

たかがウイスキー一杯で、こんなにだらしなく酔ぱらつたことについては、私は今までも恥かしく思つてゐる。その日、私はとめどなくげらげら笑いながら、そのまま「いでゆ」から出てしまつたのであるが、宿へ帰つて、少しずつ酔のさめるにつれ、先刻の私の間抜

けども阿呆らしいともなんとも言いようのない狂態に対する羞恥と悔恨の念で消えもりたい思いをした。湯槽にからだを沈ませて、ぱちやぱちやと湯をはねかえらせて見ても、私の部屋の畳のうえで、ごろごろと寝がえりを打つて見ても、私はやはり苦しかった。わかい女のまえで、白痴に近い無礼を働いたということは、そのころの私にとつて、ほとんど致命的でさえあつたのである。

どうしよう、どうしよう、と思い悩んだ揚句、私はなんだか奇妙な決心をした。「初恋の記」——私が或る新進作家の名前でもつて、二三行書きかけているその原稿を本気に書きつけようとしたのであつた。私はその夜、夢中で書いた。ひとりの不幸な男が、放浪生活中、とあるいぶせき農家の庭で、この世のものでないと思われるほどの美少女に逢つた物語であつた。そして、その男の態度は、あくまでも立派であり、英雄的でさえあつたのである。私は、これに依つて、ひそかに私自身の大失敗をなぐさめられたいと念じていたのであつた。昼に見た「いでゆ」の少女に対するこらえにこらえていた私の情熱が、その農家の娘に乗りうつり、われながら美事な物語ができたのである。私はいまでもそう信じているのであるが、あのような口マンスは、おそらくは私が名前を借りたその新進作家ですら書けないほどの立派なできばえだつたのである。

夜のしらじらと明けそめたころ、私はその青年と少女とのつましい結婚式の描写を書き了えた。私は奇しきよろこびを感じつつ、冷たい寝床へもぐり込んだ。

眼がさめると、すでに午後であつた。日は高くあがつていて、たこの唸うなりがいくつも聞えた。私はむづくり起きて、前夜の原稿を読み直した。やはり傑作であつた。私はこの原稿が、いさゞぐにでも大雑誌に売れるような気がした。その新進作家が、この一作によつて、いよいよ文運がさかんになるぞと考えたのである。

もはや私にとつて、なんの恐ろしいこともない。私は輝かしき新進作家である。私は、からだじゅうにむくむくと自信の満ちて来るのを覚えた。

その日の夕方、私は二度目の「いでゆ」訪問を行つた。

## 六

私が「いでゆ」のドアをあけたとたんに、わつと笑い崩れる少女たちの声が聞えた。私はどぎまきして了つた。ひらつと私の前に現れたのが、昨日の断髪の少女であつた。少女は眼をくるつと丸くして言つた。

「いらっしゃいまし。」

少女の瞳のなかに、なんの侮蔑も感じられなかつた。それが私を落ちつかせた。それは、昨日の私の狂態も、まんざら大失敗ではなかつたのか。いや、失敗どころか、かえつてこの少女たちに、なにか勇敢な男としての印象を与えたのかも知れない。そう自惚れて私は、ほつと溜息ついて、傍の椅子に腰をおろした。

「きょうは、私、サアヴィスしないことよ。」

日本髪の少女は、そう言つていやらしく笑いこけた。

「いいわよ。」断髪の少女が長い袖そでで日本髪の少女をぶつ真似をした。「私がするわよ。ねえ、私、だめ？」

「ふたり一緒にいい。」

私は、酒も飲まぬうちに酔つぱらつていた。

「あら！ 欲ばりねえ。」

断髪が私をにらんだ。

「いや、慈悲ぶかいんだ。」

「うまいわねえ。」

日本髪が感心した。

私は面白をほどこして、それからウイスキーを命じた。

私は、私に酒飲みの素質があることを知った。一杯のんで、すでに酔つた。二杯のんで、さらに酔つた。三杯のんで、心から愉快になつた。ちつとも気持がわるいことはないのである。断髪の少女が、今夜は私の傍につききりであつた。いよいよ、気持がわるい筈はないのである。私の不幸な生涯を通じて、このときほど仕合せなことはいちどもなかつた。けれども私は、その少女と、あまり口数多く語らなかつた。いや、語れなかつた。

「君の名は、なんて言うの？」

「私、雪。」

「雪、いい名だ。」

それからまた三十分も私たち黙つていた。ああ、黙つても少女が私から離れぬのだ。沈黙のうちに瞳<sup>ひとみ</sup>が物語るこのよろこび。私が昨夜書いた「初恋の記」にも、こんな描写がたくさんたくさんあつたのだ。夜がふけるとともにお客様がぽつぽつ見えはじめた。やはり雪は、私の傍を離れなかつたけれど、他のお客様に対する私の敵意が、私をすこし饒<sup>じょう</sup>舌<sup>ぜつ</sup>にした。場のにぎやかな空気が私を浮き浮きさせたからでもあつたろう。

「君、僕の昨日のところね、あれ、君、僕を馬鹿だと思つたろう。」

「いいえ。」雪は頬を両手でおさえて微笑んだ。「しゃれてると思つたわ。」

「しゃれてる？ そうか。おい、君、ウイスキイもう一杯。君も飲まないか。」

「私、飲めないの。」

「飲めよ。きょうはねえ、僕、うれしいことがあるんだ。飲めよ。」

「では、すこうし、ね。」

雪は、そう言つてカウンタア・ボックスに行つて、二つのグラスにウイスキイをなみなみとたたえて持つて來た。

「さあ、乾杯だ。飲めよ。」

雪は、眼をつぶつてぐつと飲んだ。

「えらい。」私もぐつと飲んだ。「僕ね、きょうはとても、うれしいんだ。小説は書きあげたし。」

「あら！ 小説家？」

「しまつた。見つけられたな。」

「いいわねえ。」

雪は、酔っぱらつたらしく、とろんとした眼をうつとり細めた。それから、この温泉地に最近来たことのある二三の作家の名前を言つた。ああ、そのなかに私の名前もあるではないか。私は、私の耳をうたがつた。醉がいちじに醒める気がした。ほんものがこのまちに来ている。

「君は、知つているの？」

私は、こんな場合に、よくもこんなに落ちつけたものだ、といまでも感心している。臆病者というものは、勇士と楯のうらおもてぐらいのちがいしかないものらしい。

「いいえ。見たことがないわ。でもいま、そのかた、百花楼に居られるつて。あなた、おともだち？」

私は、ほつと安心した。それでは、私のことだ。百花楼のおなじ名前の作家がふたりいる筈がない。

「どうして百花楼にいることなんか知れたんだろう。」

「それあ、判るわ。私、小説が少し好きなの。だから、気をつけてるの。宿屋のお女中さんたちから聞いたわ。なんと言つたつて、狭いまちのことだもの。それあ、判るわ。」

「君は、あいつの小説、好きかね。」

私は、わざと意味ありげに、にやにや笑つた。

「大好き。あの人花物語という小説、」言いかけて、ふつと口を噤んだ。「あら！ あなただわ。まあ、私、どうしよう。写真で知つてゐるわよ。知つてゐるわよ。」

私は夢みる心地であつた。私が、かの新進作家と似てゐるとは！ しかし、いまは躊躇するときでない。私は機を逸せず、からからと高笑いした。

「まあ、おひとが悪いのねえ。」少女は、酒でほんのり赤らんでいる頬をいつそう赤らめた。「私も馬鹿だわねえ。ひとめ見て、すぐ判らなけれあ、いけない筈なのに。でも、お写真より、ずっと若くて、お綺麗なんだもの。あなたは美男子よ。いいお顔だわ。きのうおいでになつたとき、私、すぐ。」

「よせ、よせ。僕におだては、きかないよ。」

「あら、ほんと。ほんとうよ。」

「君は酔っぱらつてるね。」

「ええ、酔っぱらつてるの。そして、もつと、酔っぱらうの。もつともつと酔っぱらうの。

けいやあん。」他のお客とふざけている日本髪の少女を呼んだ。「ウイスキーお二つ。

私、今晚酔っぱらうのよ。うれしいことがあるんだもの。ええ、酔っぱらうの。死ぬほど

酔っぱらうの。」

## 七

その夜、私は酔いしれた雪を、ほとんど抱きかかえるようにして、「いでゆ」を出た。雪は、私を宿まで送つてやると言い張るのである。いちめんに霜のおりたまちはしづかにしずまつていた。ひとめにかかると、かえつて仕合せであると私は思つた。そとへ出て冷たい風に当ると、私の醉はさつと醒めた。いや、風のせいだけではなかつた。酔いしれた少女のからだのせいでもあつた。しつとりと腕に重い、この魚のようにはつらつとした肉体の圧迫に、私は醉心地どころではなかつた。幸福にもまちで誰にも見つからずに私たちは百花楼の門まで來た。大きい木の門は固くとざされてゐた。私は当惑した。

「おい、困つた。門がしまつてゐるんだ。」

「たたいたらいいんですよ。」

雪は、私の腕からするつとぬけて、ふらふら門へ近寄つた。

「よせ、よせ。恥かしいよ。」

酔った女をつれて、夜おそく宿の門をたたいたとあれば、だいいち新進作家としての名譽はどうなる、死んでもそのようなさもしいことはできない。

「おい、君、もう帰れよ。君は、いでゆに寝泊りしているんだろう？　こんどは僕が送つて行つてやるよ。帰れよ。あした、また遊ぼう。」

「私、いや。」雪は、からだをはげしくゆすぶつた。「いや、いや。」

「困るよ。じゃ、ふたりで野宿でもしようと言うのか。困るよ。僕は、宿のものへ恥かしいよ。」

「ああ、いいことがあるわ。おいでよ。」

雪は手をぴしゃと拍つて、そう言つてから、私の着物の袖そでをつかまえ、ひきずるようにしてぱたぱた歩きだした。

「なんだ、どうしたんだ。」

私もようよろしながら、それでも雪について歩いた。

「いいことがあるの。でも恥かしいわ。あのね、百花楼ではね、ときどきお客様が女のひとを連れこむのに、いやよ、笑っちゃ。」

「笑つてやしないよ。」

「そんな入口があるのよ。ええ、秘密よ。湯殿のどこからはいるの。それは、宿でも知らぬふりしているの。私、でも、話に聞いただけよ。ほんとのことは知らないわ。私、知らないことよ。あなた、私を、みだらな女だと思つて。」

変に真面目な口調だつた。

「それあ、判らん。」

私は意地わるくそう答えて、せせら笑つた。

「ええ、みだらな女よ。みだらな女よ。」

雪はひくくそう呟いてから、ふと立ちどまつて泣きだした。「どうせ、私は。でも、でも、たつた一度、うん、たつた二度よ。」

私はわれを忘れて雪を抱きしめた。

## 八

その謂わば秘密の入口から、私はまだ泣きじやくつている雪をかかえて、こつそりと私の部屋へはいった。

「静かにしようよ。他に聞えると大変だ。」

私は雪を坐<sup>させ</sup>らせて、なだめた。醉は、まつたく醒めていた。

雪の泣きはらした眼には、電燈の明るい光がまぶしいらしく、顔からちよつと手を離したが、またすぐひたと両手で顔を被つた。

寒さに赤くかじかんだ手の蔭から囁いた。

「私を軽蔑して？」

「いや！」私もむきになつて答えた。「尊敬する。君は、神さまみたいだ。」

「うそよ。」

「ほんとうだ。僕は君みたいな女が欲しくて、小説を書いてるのだよ。僕は、ゆうべ初恋の記という小説を書いたけれど、これは、君をモデルにして書いたのだ。僕の理想の女性だ。読んでみないか。」

私は机のうえの原稿をとりあげて、どたりと雪の方へなげてやつた。

雪は顔から手を離して、それを膝<sup>ひざ</sup>のうえにひろげた。ああ、そこには、私の名前でない男の名が、いや、ほんとうは私の名が、おおきく書かれていた。雪は、溜息<sup>ためいき</sup>ついて黙読をはじめた。私は、机のそばに坐つて、ひつそりと机に頬杖つき、わが愛読者の愛すべき

横顔を眺めた。ああ、おのれの作品が眼のまえで、むさぼるように読まれて居るのを眺めるこの刺すような歓喜！

雪は二三枚読むと、なんと思つたか、ぱつと原稿を膝から払いのけた。

「だめ。私読めないの。まだ酔っぱらつているのかしら。」

私はいたく失望した。たとえ、どのように酔つていたとて、一行読みだすと、たちまちに酔も醒めて、最後の一<sup>し</sup>行まで、胸のはりさける思いでむさぼり読まれて然るべき傑作ではないか。ウイスキー三杯ぐらいの酔のために、膝からはらいのけるとは！

私は泣きたくなつた。

「面白くないのか？」

「いいえ、かえつて苦しいの。私あんなに美しくないわ。」

私は、ふたたび勇氣を得た。そうだ、傑作にはそのような性格もあるのだ。よすぎて読めない。これは有り得る。そう安心すると、私は雪に対し、まえよりも強い、はばのひろい愛情を覚えたのだった。恋愛に憐憫の情がまじると、その感情はいつそうひろがり高まるものらしい。

「いや、そんなことはない。君の方が美しい。顔の美しさは心の美しさだ。心の美しいひ

とは必ず美人だ。女の美容術の第一課は、心のたんれんだ。僕はそう思うよ。」

「でも、私、よこれているのよ。」

「判らんなあ。だから。言つてるじやないか。からだは問題でないんだ。心だよ、心だよ。」

そう言いながら、私はわくわく興奮しだした。雪の傍にある原稿をひつたくつて、ぴりぴりと引き裂いた。

「あら！」

「いや、いいんだ。僕は君に自信をつけてやりたいのだ。これは傑作だ。知られざる傑作だ。けれども、ひとりの人間に自信をつけて救つてやるために、どんな傑作でもよろこんで火中にわが身を投ずる。それが、ほんとうの傑作だ。僕は君ひとりのためにこの小説を書いたのだ。しかしこれが君を救わずにかえつて苦しめたとすれば、僕は、これを破るほかはない。これを破ることで、君に自信をつけてやりたい。君を救つてやりたい。」

私は、尚も、原稿を裂きつづけた。

「判つたわよ。判つたわよ。」雪は声をたてて泣きだした。泣きながら叫んだ。「私、泊るわ。ねえ、泊らしてよ。もつともつと。話を聞かしてよ。私、泊るわ。かまうものか。」

かまうものか。」

## 九

そのように善良な雪を、なぜ私が殺したのか！　ああ、私は、一言も弁解ができない。なにもかも、私が悪い！　虚栄の子は、虚栄のために、人殺しまでしなければいけない。私は私の過去に犯した大罪を、しらじらしく、小説に組みたてて行くほどの、まだそれほどどの破廉恥漢ではない。以下、私は、祈りの気持で、懺悔の心で、すべてをいつわらずに述べてみよう。

私が雪を殺したのは、すべて虚栄の心からである。その夜、私たちは、結婚のちぎりをした。私の知られざる傑作「初恋の記」のハッピイ・エンドにくらべて、まさるとも劣らぬ幸福な囁きを交した。私は、結婚を予想せずに女を愛することができなかつた。

翌朝、私は、雪と一緒に、またこつそり湯殿のかげの小さいくぐり戸から外へ出たのである。なぜ、一緒に出たのであろう。わかい私には、そのような一夜を明して、女をひとりすぐなく帰すのは、許しがたい無礼であると考えられたのである。夜明けのまちには、

人ひとり通らなかつた。私たちは、未来のさまざまな幸福を語り合つて、胸をおどらせた。私たちは、いつまでもそうして歩いていたかつた。雪は旅館の裏山へ私を誘つた。私も、よろこんでついて行つた。くねくね曲つた山路をならんでのぼりながら、雪は、なにかの話ついでに、とつぜん或る新進作家の名前で私を高く呼んだ。私は、どきんと胸打たれた。雪の愛している男は私ではない。或る新進作家だつたのだ。私は目の前の幸福が、がらがらと音をたてて崩れて行くのを感じたのである。ここで私は、すべてを告白してしまつたら、よかつたのである。すくなくとも雪を殺さずにすんだのかも知れない。しかし、それができなかつた。そんな恥かしいことは死ぬるともできなかつた。私はおのれの顔があおあおざめて行くのを、自身ではつきり意識した。

雪も流石に、私のそんなうち沈んだ様子に不審をいだいたらしかつた。

「どうなすつたの？ 私、判るわ。いやになつたのねえ。あなたの花物語という小説に、こんな言葉があつたわねえ。一目見て死ぬほど惚れて、二度目には顔を見るさえいやになる、そんな情熱こそはほんとうに高雅な情熱だつて書かれていたわねえ。判つたわよ。」

「いや、あれは、くだらん言葉だ。」

私は、あくまでも、その新進作家をよそわねばならなかつた。どうせ判ることだ。まつ

かな贋物だと判ることだ。ああ、そのとき！

私は、できるだけ平静をよそつて、雪のよろこびそうな言葉をならべた。雪は氣嫌を直した。私たちは、山の頂きにたどりついた。すぐ足もとから百丈もの断崖になつていて、深い朝霧の奥底に海がゆらゆらうごいていた。

「いい景色でしよう？」

雪は、晴れやかに微笑みつつ、胸を張つて空氣を吸いこんだ。

私は、雪を押した。

「あ！」

口を小さくあけて、嬰兒<sup>えいじ</sup>のようなべそを搔<sup>か</sup>いて、私をちらと振りむいた。すつと落ちた。足をしたにしてまっすぐに落ちた。ぱつと裾<sup>すそ</sup>がひろがった。

「なに見てござる？」

私は、落ちついてふりむいた。山のきこりが、ひつそり立つっていた。

「女です。女を見ているのです。」

年老いたきこりは、不思議そうな面持で、崖のしたを覗いた。

「や、ほんとだ。女が浪さ打ちよせられている。ほんとだ。」

私はそのときは放心状態であつた。もし、そのきこりが、お前がつき落したのだろうと言つたら、私はそうだと答えたにちがいない。しかし、それは、いまにして判つたのであるが、そのきこりが、私を疑えない筈だつた。それは断崖の百丈の距離が、もたらして呉れた錯覚である。たつたいま手をかけて殺した男が、まさか、これほど離れた場所に居れる筈がない。私が、当前、山の上を散歩していたということは、私の不在<sup>アリバイ</sup>證明にさえなるかも知れぬ。このような滑稽な錯覚が現実にままであるらしい。きこりは私を忘れて、山のきこり仲間にふれ歩いた。それから雪の死体を海から引きあげるのに三時間以上をついやした。断崖のしたの海岸まで行くのには、どうしても、それだけの時間がかかるのである。私は、ひとりぼんやり山を降りた。ああ、しかし内心は、ほつとしていたのである！ これでもう何もかも、かたがついた。私はなんの恥辱も受けない。もう東京へ帰ろう。雪が、ゆうべ私のところへ泊つたことは誰も知らぬ。私は、いま、ただ朝の散歩から帰つたところだ。「いでゆ」でも雪のほかは、私のにせの名前も居どころをさえ知らない。知れないうちに東京へ帰ろう。東京へ帰つたならば、もうしめたものだ。ああ、私が本名を言わずに、他人の名前を借りたことが、こんなとき役立とうとは。

## 十

万事がうまく行つた。私は、わざと出発をのばして、まちの様子をひそかにさぐつた。雪が酒に酔つて、海岸を散歩して、どこかの岩をふみすべつたのだろう、と言うことにきまつた。雪は海の深いところに落ちこんだらしく、さのみ怪我けがしていなかつたようだ。客を送つて出たというがそれは雪の酔つぱらつたときの癖で、誰をでも送つて行くのだそうだ。そんな、だらしない癖が、いけなかつたと、宿のものも言つていた。その客は、東京のひとだそうだ、となにげなさそうに言つていた。もはや、ぐずぐずして居られぬ。私は、ゆつくり落ちつきながら、尚いちにち泊つて、それから東京へ帰つた。

万事がうまく行つたのである。すべて断崖のおかげであつた。断崖が高すぎたのである。もし、十丈の断崖だつたら、或いは、こんなことにならなかつたかも知れぬ。しかし、私ときこりの見た雪は、ただぼんやりした着物の赤い色だけであつた。一瞬にして、ふたつの物体が、それこそ霞をへだてて離れ去り得る、このなんでもない不思議が、きこりには解けなかつたのであろう。

それから、五年経つてゐる。しかし、私は無事である。しかし、ああ、法律はあざむき

得ても、私の心は無事でないのだ。雪に対する日ましにつのるこの切ない思慕の念は、どうしたことであろう。私が十日ほど名を借りたかの新進作家は、いまや、ますます文運隆々とさかえて、おもしもおされもせぬ大作家になつてゐるのであるが、私は、——大作家になるにふさわしき、殺人という立派な経験をさせした私は、いまだにひとつの傑作も作り得ず、おのれの殺した少女に対するやるせない追憶にふけりつつ、あえぎあえぎその日を送つている。

(完)



## 青空文庫情報

底本：「太宰治全集10」 ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

初出：「文化公論 第四卷第四号」

1934（昭和9）年4月1日発行

※初出時の署名は「黒木舜平」です。

入力：柴田卓治

校正：石川友子

2000年4月19日公開

2016年7月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 断崖の錯覚

## 太宰治

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>